論文

藤学園のスクール・アイデンティティとしての「藤」にまつわる視覚イメージに関する考察

外﨑　由香*

１．序

藤学園といえば「藤の花」と「藤色」を連想する人が多いだろう。歴代の学長たちは、古歌『下がるほど人の見上ぐる　藤の花』を校訓のひとつである「謙虚」を重ねており、これは学生らにも浸透している。藤学園は 1925（大正 14）年に校名を「藤」とし、「藤の花」をシンボル化し、校章に使用している。また、藤の花から連想される「藤色（薄紫）」をスクールカラーとし、HP や広告媒体等で使用している。このように表象化することが、藤学園のアイデンティティを表現するために役立ったであろうと推測される。特にシンボル（象徴）や色彩など視覚イメージの効用は多能な可能性があると考えられる。

本論文では、藤学園のスクール・アイデンティティを視覚イメージならびに色彩という視点から着目し考察を行う。まず、同じく花卉を使用したミッションスクールの雙葉学園や白百合学園における例と比較することで藤花の位置づけを検討する。次に創立当時から現在までの文献や資料から、言説、図像、色彩、ランドスケープ等に見られる布置を示し、表象がもたらす機能や効果の考察を行う。

２．明治大正期のミッションスクールにおける花卉

2ー1.「幼きイエス会」の女学校

（１）横浜紅蘭女学校と菫女学校

フランス系の「幼きイエス会」（17 世紀創設、別名サンモール修道会）は、1872 年（明治 5 年）にフランスから来日した修道女たちが横浜の地で孤児の救済と外国人の子弟教育を始め、その活動を下敷きとして明治後半になって横浜と東京を中心に女子学校教育を始めることになる。1900（明治 33）年に横浜紅蘭女学校、1902（明治 35）年に菫女学校（横浜）、1909（明治 42）年には東京に雙葉高等女学校を開校した。創設者はいずれも当時の修道院長のサント＝テレーズであり、それぞれの校長を兼ねた[1]。横浜紅蘭女学校は、第二次大戦後になって横浜雙葉女子中・高等学校となり、孤児教育から始まった菫女学校は昭和に入って東京に移転し、戦後、雙葉第二初等学校に吸収されて今日の田園調布雙葉女子中・高等学校に発展していく。

サント=テレーズ院長は、女学校の校名を決めるにあたって花の名にこだわった。紅蘭の語源については定かではないが、その古めかしい名称からは鎌倉時代の「春は櫻梅桃李の花あり、秋は紅蘭紫菊の花あり、皆これ錦繡の色、酷烈の匂なり」（古今著聞集・草木の巻）

* 藤女子大学大学院人間生活学研究科　人間生活学専攻　修士課程

といった古典文学が髣髴されるものの、外国人修道女がその発想をもったとは思えない。修道会の中の日本人修道女、あるいは横浜の信者のコミュニティから生み出された可能性がある。ただ、この名称が後に現れる「菫」や「雙葉」に対して、派手やかな「錦繍」の色彩を前面に掲げているところを見ると、横浜の外国人居留地に接した山手に立地したことが大きく作用しているようである。なお、1899（明治 32）年の高等女学校令の定める高等女学校の認可については、サンモール会は東京を優先し、横浜紅蘭が高等女学校になるのは 1933（昭和 8）年になってからである。

（2）雙葉学園

「雙葉」という校名の起源については、「ふたば葵」という植物の名からとられたことが同校の校史に記されている。1897（明治 30）年、サンモール会の修道女たちは、英語・フランス語・西洋作法・西洋技法を日本女性に教える施設を東京の赤坂葵町に開き、その町名から思いついて、その施設を「雙葉会」と名づけたという。「ふたば葵は、一本の茎の先に、必ず二枚の葉をつける（図 1）。それは、外国語の勉強を通して、西洋の女性と日本の女性が深い友情の絆によって結ばれることの象徴である」と説明している。1909（明治 42 年）、東京四谷の現在の地に高等女学校を開校した時、この「雙葉」の名称が引き継がれた。葵は徳川将軍家の家紋であり、徳川家の印を敢えて引き継ぐことで、明治国家の中での同校の権威づけに寄与している。

雙葉学園の校章（図 2）は、雙葉葵ではなく、マルグリット（フランスギク）の花がエンブレムとして盾とともに描かれている。上下にあるフランス語は校訓の、「SIMPLE DANS MA VERTU FORTE DANS MON DEVOIR（徳においては純真に義務においては堅実に）」が描かれている。左右にあるマルグリットの花は「純真」（SIMPLE）を、中央の盾は「堅実」（FORTE）をあらわしている。十字架は、教育がキリストの教えに基づいていることを、開かれた聖書は、ここに真理の光を求めることを、ロザリオは、祈りの大切さを示している。糸巻は、勤労と奉仕の喜びを、盾に斜めにかかる綬は、神の子である人間の尊厳を自覚して生きることを教えている。

図 1.ふたばおあい

図 2. 雙葉学園校章

このように雙葉学園は明確な根拠を学園のホームページで公開している[2]。この校章はサンモール修道会の理念を体現しており、実際、サンモール会が経営するシンガポールの聖嬰女子学校（Saint Nicholas Girls' School、「聖嬰」は「幼きイエス」の中国語）でも同じ校章が用いられている。花卉の選択もフランス起源であることが一目瞭然である。しかし、校名の雙葉葵との連関は薄い。雙葉学園にスクールカラーの表記はなく、広告媒体からも色彩を統一している傾向は見られなかった。

2ー2.　白百合学園

白百合学園もフランス系のミッションスクールで、設立母体は 17 世紀のフランスに誕生したシャルトル聖パウロ修道女会である。1878（明治 11）年、函館に 3 人のフランス人修道女が来日し、その 3 年後の 1881（明治 14）年に東京神田猿楽町に女子仏学校を設立した[3]。白百合高等女学校と名前が改められたのは、それから半世紀あまりを経た 1935（昭和 10）年のことで、高等女学校認可がきっかけであった。

校章は白百合の花をテーマにしている（図 3)。白百合の花は、「受胎告知」に示されるように聖母マリアのアトリビュートとして天使が捧げる構図となることが多い。清らかなやさしさを持つ、凛とした女性の姿を象徴している。この花のように気品を持ち、優しくりりしくあってほしいという願いと、愛に満ちた社会の建設のために努力してほしいという思いがこめられている。シャルトル聖パウロ修道女会の紋章は、発祥地のシャルトルの地のシャルトル大聖堂、聖書そして 4 本の白百合を組み合わせており、白百合自体はイタリア・ルネサンス風（たとえばボッティチェリ）の意匠をまとっている。

他方、百合のマークは、フランスのブルボン王家の紋章 (図 4) としてよく知られている。槍型のこの百合が白で表わされた場合、フランス王家を救った救国の聖女ジャンヌ・ダルクの紋章として使われることが多く、実際に、これを校章に採用したのは、同校がカトリックの宣教を目的にフランスを後ろ盾とした文字通りのミッションスクールであることを表象化したと読み取ることが可能である。高等女学校開校の 1935（昭和 10 年）が、軍国主義的傾斜を強めていった日本で、敢えて対峙すべきフランスのエンブレムを導入したことに修道会の姿勢を見て取ることができる。

実際、白百合学園は、学園の沿革と理念から校章の起源を説明し、その内容をホームページで公開している[4]。スクールカラーの表記はないが、白百合の「白」が該当するようである。函館白百合学園中高等学校がブログで「白百合を色にたとえると何色か？」投票を行った結果、「白」が白百合をイメージする色に選ばれていた[5]。

図 3.白百合学園校章

図 4. フランスのブルボン王家の紋章

2ー3. 藤学園

藤学園の設立母体はフランス系の前 2 者と異なり、ドイツの聖ゲオルギオのフランシスコ修道会である。創設の労をとったのは札幌のヴェンセスラウス・キノルド司教（1871-1952 年）で、本国ドイツから 3 人の修道女（クサベラ・レーメ他 2 人）を招き、今日の藤学園の礎を築いた。1925（大正 14）年に藤女子高等女学校として文部省から設立許可が下り、校名を「藤」とした。当初から高等女学校の認可を前提に設立準備を進め、花の名前にこ

だわった背景には横浜の紅蘭や東京の雙葉の例が大きく影響していたと推測される[6]。「藤」は「謙虚」、「忠実」、「潔白」の徳目を象徴したものである。本当の自分を知り、ますます励もうとする「謙虚」、勉強に仕事にまた人に対して「忠実」いつでも明るく、良心に恥じない姿をあらわそうとする「潔白」、この 3 つを校訓としている。

藤学園の、建学の精神は、カトリックの精神に基づいて、教育と研究を通して広い知識と豊かな心をそなえ、将来家庭・社会を担っていく女性を育成し、かつまた国際的視野をもった教養ある人間形成を目的とするとされる[7]。

校名の「藤」は創設者のキノルド司教とクサベラら 3 人の修道女が考案した。詳しくは次項で紹介するが、創立当時、周囲は放牧地で一面の草原であり、野生の藤の木が散在していた。かつては札幌の藤の名所として親しまれた場所だったことに由来する。

校章（図 5）は藤の花を図像化したものである[8]。 校章は校舎の中央塔や後述する奉安殿（図 6）にも取り付けられている。図 7 は 1932（昭和 7）年頃の中央塔の校章である。記録によると、1957（昭和 32）年に校章部分は時計に変更されるが、1991 年（平成 3 年）以降は時計も埋められ何もない状態になる。解体後、キノルド館として生まれ変わった時に校章は復元されている。（図 8）

ここまで述べたように、同じく花卉を使用したミッションスクールの雙葉学園や白百合学園と比較した結果、校名の「藤」は実際の土地に根差した自然景観（ランドスケープ）から生まれたものであり、徳川将軍家やブルボン王家を象徴する花卉とはまったく異なった背景から構想されたことが理解できる。ある種の自然主義を読み取ることも可能である。時代的には、自由の気風がまだ残り、新開の北海道の地でおおらかな発想で高等女学校を生み出しえたのである。ここで注目したいのは、創設者キノルドとクサベラら 3 人の修道女が見たのは野生の藤の花であり、手入れの行き届いた藤棚ではない。花は可憐な薄い紫で咲くほどに下へ下へと延びる謙遜的な姿をしているが、一方、蔓は力強く勢いがある。北海道の発展のためには、とりわけ、女子教育が最も重要であると考えていたキノルド司教らにその姿は、「藤のツルのように強くしなやかな女性」をイメージさせ、図 5 のような校章にも使用したのではないだろうか。

図 5. 校章

①藤のツルのように
強くしなやかな女性を
イメージ
②藤の葉をイメージ
③藤の花をイメージ

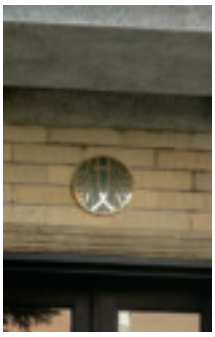
図 6. 奉安殿の校章

図 7.中央塔の校章

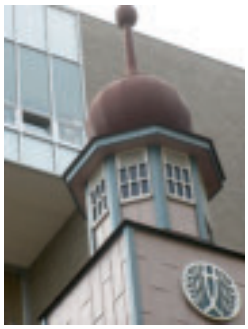
図 8. 復元された校章

３．　藤高等女学校の花卉景観

3ー1. 開校時の校舎外観の様子

藤学園校舎からスクール・アイデンティティを考察する。記録によるとキノルド司教は1915（大正 4）年に、札幌市北区北 16 条西 2 丁目に 1,800 坪の学校用地を購入し、同 1 丁目に住宅を構え、留守番の女性を住まわせた。建築資金が整った 1924（大正 13）年に女学校校舎の上棟式を迎える。設計はマックス・ヒンデル Max Hinder（1887-1963）で、大正末期から昭和初期に札幌に在住したスイス人建築家である。翌年の 1925（大正 14）年に開校、初代シスター・ヨハンナ・ベルクマンス・サロモン校長が 5 月に病死して、7 月からシスター・.クサベラ・カタリナ・レーメ（1888-1951）が校長となった。

同年 10 月 11 日付け『カトリックタイムス』には次のように報じられている。「札幌の北 16 條西 2 丁目に、3 階建のバロック風まがいの建物がそびえてゐるが、これが四月から開校された藤高等女学校である。（略）この四月三百数十名の志願者の中から百五十名[9]を入学させたばかりで、職員数十一、教室数は十四で、校舎の敷地は千八百坪あり、寄宿舎も校舎裏にある。門の柱には“みみづく”の彫刻があり、これは深くよく考えよという意味をあらはしたものださうである」とある[10]。当時の札幌は 1924（大正 13）年に道庁前から豊平橋まで木製ブロックによる試験舗装道路が行われたが、ほとんどは土や砂利道で雨や雪で道路はぬかるみ、とても近代的な街並みとは言えなかった。マックス・ヒンデルの設計した異国情緒溢れた建築物は物珍しかったのではないだろうか。

3ー2. 校舎外観の色彩

ライン川流域地方（ドイツ＝スイス）の意匠を有する校舎の外観の色彩について、現在の大学広報では「屋根はすべて亜鉛メッキ鉄板長尺葺きで色は赤、外壁にも同じ鉄板が張られていたが、垂直方向の一文字葺きで色は薄桃色であった。（初めはカボチャ色）」と記されているが、どの時代に塗りかえられたかは明らかでない[11]。ヒンデルの建築史的研究を行ってきた角幸博は「現在のような薄いピンクではなく、芥子色に近い色であった」と述べ、みずから撮影した 1977（昭和 52）年の外観写真をその傍証とする[12]（図 9）。写真を見ると、色彩の劣化はあるものの、校舎の外壁が黄味を帯びているのが確認できる。他方、図 10 は 1984（昭和 59）年撮影にされた校舎の外壁は既に薄いピンク色となっており、この間に外装の色彩が変化したことが窺える。図 11 は現在のキノルド記念館（校舎解体後、一部を再建）で、色相は 10R7/2 の薄いピンクであることは著者の測色調査で確認済みである[13]。

校舎外観の色彩が塗り替えられた時期について記録が残っていないが、学内関係者の記憶では「おそらく花川校舎が出来た頃ではないだろうか」ということである[14]。上記 1977 年～1984 年の間で、花川に関係する出来事をピックアップすると、1984（昭和 59）年に花川キャンパスの最初の建造物としてセミナーハウスが落成している。セミナーハウス外観の色彩はピンク色であり、この時期に校舎外観も塗り替えられたものと考えられる（図 12）。

図 9.芥子色のキノルド館（1977 年）

図 10. 薄ピンク色のキノルド館（1984 年）

図 11.現在のキノルド館

図 12.セミナーハウス（1984 年落成）

3ー3. 植生と景観ー藤棚

校舎敷地内の植生から藤学園のスクール・アイデンティティを考察する。1933（昭和 8）年頃に描かれた校舎鳥瞰図を見ると、正門は図の中央（南西の角地）に確認できる（図 13）。正門から校舎に向かう南側に藤棚が窺える。これは、開校から 3 年後の 1928（昭和 3）年 10 月に昭和天皇即位記念事業として、在校生の寄付で藤棚を作ったものである。おそらく、この記念事業により藤棚が初めて校舎内に設置されたと考えられる（図 14、15）。現在も同じ位置に藤棚が現存するが、当初の藤の木は老木となって植え替えられ、現在の藤棚は 2 代目である[15]。札幌藤高等女学校卒業生の記述によると「まだ肌寒い昭和 5 年 4 月、初めて質素な校門をくぐり見上げると『藤』の蔓が門一杯に絡んでいた」とある[16] 。藤女子短期大学 50 年・藤女子大学 40 年記念誌には、「昭和 30 年 10 月、昭和天皇の即位記念事業の一つとして、校庭の正面から 16 条通りに面した通用門までで、藤棚を設け、ここに校名の姿を示すことにした」という記録もある[17]。最近では 2001（平成 13）年に北 16 条キャンパス新館落成時に、新館の南側に藤棚を設置している。

さらに、伝統的に継続されているのが藤棚下での集合写真である。同記念誌には国語科 1 回生が藤棚の前で撮った集合写真が掲載されている（図 16）。最新の藤女子大学アルバム（2011 年度卒業）でも藤棚の前で撮った集合写真がいくつか掲載されており、藤棚設置から現在まで継続していることが窺える。

このように藤棚は藤学園を象徴する場所であり、北 16 条校舎以外に石狩花川キャンパスや藤学園旭川中高等学校にも藤棚が設置されている。花川キャンパスの藤棚は 1992（平成 4）年 10 月に、北 16 条キャンパスと同じく鉄製で玄関前ロータリーにある聖母子像の背面に作られた。キャンパスの植栽等のメンテナンスを手掛けている(株)石狩環境メンテナンスセンターの寄贈によるものである。旭川中高等学校では、クサベラの自らの手によって

1953（昭和 28）年に植樹された藤棚が現存する（図 17）[18]。 つまり、藤学園にとって藤棚は学校のアイデンティティを示す象徴的な場所であり景観であることが、藤棚の設置と藤の植樹という行為によって示されており、スクール・アイデンティティとして深く根付いているといってよい。

図 13. 1933 年頃の校舎鳥瞰図

図 14. 旧正門の藤棚

図 15. 設置された当時の藤棚

図 16. 藤棚下の集合写真(1948 年)

図 17. 旭川中高等学校の藤棚

3ー4. マリア像と藤棚

（1） マリア像

校舎敷地内中央の中庭にはマリア像が建っている。1961（昭和 36）年に聖ゲオルギオのフランシスコ修道会ドイツ本部より寄贈された「白大理石の聖母像」である[19]。 図 18 は建立当時、図 19 はイシドリス総長が 1963（昭和 38）年に来校した時の様子である。同じ

年、1941（昭和 16）年以来校長の任にあった牧野キクと近所の子供たちが一緒となった写真が撮影されている（図 20）。

1992（平成 4）年に落成した花川キャンパスの玄関前ロータリーには「おん慰めの聖母」の等身大の像が建っている（図 21）。藤棚を背負って立っている姿は、春には藤色の絨毯の上でより一層白く輝いて見える[20]。 傲りを悪と考えるキリスト教において、藤の花が垂れ咲く姿が謙虚、謙遜さと女性の姿、つまりマリア像と重ねたイメージが藤学園の象徴である。校庭のマリア像はこれを視覚的に訴え、強いインパクトを与えている。

図 18. 建立当時のマリア像

図 19. 総長来校時のマリア像

図 20.
牧野キクと
近所の子供たち

図 21. 花川キャンパスのマリア像

（2）奉安殿（マリア堂）

校舎敷地内には今も奉安殿（マリア堂）が残されている。1935（昭和 10）年に開校十周年の記念行事の一環として、同窓会の援助で建設されたものであるが、その実態は天皇制イデオロギーを強化するために文部省の指導のもとに建設が半ば義務的に行われたもので、堂中には下賜された教育勅語謄本、戊申詔書本、国民精神作興に関する詔書写本、天皇・皇后両陛下の御真影が納められていた（図 22）[21]。終戦後、GHQ から奉安殿の取り壊しを命令されるが、経済的理由もあり、牧野マキが道庁と GHQ に出向き「うちの学校はマリア様のように愛のあふれる女性を育てることを願っている。奉安殿にマリア像を置きたい」と嘆願した。結果、奉安殿は残され今では数少ない歴史の手がかりとなっている（図 23）。当時の奉安殿に置かれていたマリア像は、現在は藤女子中学校・高等学校新校舎の 2 階に移されている[22]。

このように藤学園は、スイス人設計による校舎、日本的な藤棚、ドイツから送られたマリア像、軍国的な奉安殿という異質なものが混在している不思議なランドスケープであるといえる。

図 22. 奉安殿

図 23. 現在の奉安殿

4. 藤学園のスクール・アイデンティティ

4ー1. 言説からみた「藤」

（1） 校名の「藤」の背景

先述したように校名を付けたのは創設者のキノルド師とクサベラ・レーメら 3 人の修道女である。北海タイムス紙「わたしの道」（1973 年）に掲載されたクサベラ・レーメの談話取材記事からその背景が窺える。「校名の『藤』を決めるのには、若干のいきさつがある。私たちは当初、宗教的な意味合いのこもった校名にしたかった。しかし当時、日本の国情は、そろそろ国粋主義、軍国主義化の傾向を見せ始めていたため、キノルド師は、軍部の嫌う名称は避けた方がいいとおっしゃった。いろんな名前が出されました。『富士』『香蘭』『白百合』など、いい名前はすでに東京にある。結局、最後に残ったのが『藤』だった。上品な女らしさを感じさせ、ドイツ人も日本人も愛する花であった。（略）そのころ、校舎の建つ辺りはほとんど家がなく、放牧の牛の姿も見えるひなびた土地でしたが、かつては札幌の藤の名所として親しまれた場所だった」とある[23]。この発言記録にある「香蘭」は横浜の「紅蘭」の記載間違いである可能性が高く、また校名として「白百合」の名が登場するのは 1935（昭和 10）年からなので、記憶違いの可能性がある。いずれにしても、首都圏での花卉の名称を冠した女学校の存在が大きな意味を持っていたと考えられる。

ここで記述されている軍国化の波はますます激しくなり、1940 年（昭和 15）年に国は外国人校長を一切認めないという方針を国は明らかにした。外国人という理由でクサベラは校長を退き、1941（昭和 16）年に藤高等女学校開校時から教諭に就任していた牧野キク（1895･1896）が新しく校長となる。牧野キクが書いた北海道新聞のコラムによると、「校名そのものも、クサラベさまたちは、最初は宗教的な意味のこもったものにしたかったようですが、日本の国情がそろそろ国粋主義化の傾向を見せていたために断念。校舎の建った北十六条西二丁目のあたりがかつては藤の名所だったということから、この名になったと聞いている」とある。

また、藤女子大学二代目学長を務めた山下二枝（1924･1991）も「本学園創立当時、当地が放牧地で一面の草原であり、野生の藤の木が散在していたこと、創設者はここで学ぶ生徒を藤の花にあやからせて教育したいと望んで校名を『藤』と命名した」とある[24]。これらのことから、藤の校名は「藤の花」が群生した景観を参照して生み出されたもので、その逸話が代々語り継がれていることが理解できる。

（2）古歌『下がるほど人の見上ぐる　藤の花』の背景

古歌については、1921（大正 10）年に来札した 3 人の修道女が書いた日記に手がかりがある。藤女子大学の 40 年記念誌には「1924（大正 13）年。当時、北 16 条西 2 丁目付近は藤の花がたくさん咲き、『藤公園』と呼ばれていた。奢りを悪と考えるカトリックのシスターたちの目には、蔓はしなやかで折れにくく、低く花房を垂れる藤の花が謙遜の象徴と映った。そこで藤高等女学校と名付けた」とある[25]。藤の花から謙遜のイメージを読み取ったようであるが、日本に来てから間もないクサベラらが古歌を知っていたとは考えにくい。それを証明するのが先述した北海タイムス紙に掲載されていた談話取材で、その中で、クサベラは古歌について次のように語っている。「現在、教訓になっている『下がるほど人の見上ぐる　藤の花』の古歌を、創立時に私は知らなかったが、謙虚、忠実、潔白の校風を作ろうと考えていた私たちには、そのシンボルにふさわしい校名だった」とある[26]。

それでは一体、いつの時期に、誰が言い始めたのだろうか。その手がかりが記録されているのが、『北見藤学園だより』校長水野清哉の贈る言葉（2011 年発行）である。「初代校長のシスター牧野キク先生は、五十五年前、藤の教育について、いにしえから伝えられた古歌で教えた。『下がるほど人の見上ぐる　藤の花』のように。厳寒の冬をその細い蔓がしなやかに耐えるように強く、春の若葉が生き生きと命あふれるように明るく、爽やかな初夏に美しく香る花のように清らかに生きてください。私は先生方と共に、皆さんの前途に神様の祝福をお祈りします」とある。1956 年（昭和 31）年に北見藤女子高等学校の初代校長も務めた牧野が、古歌を訓話として残したのである。

開校当初より教員として勤め、博学で知られる牧野が言い始めたことで、おそらくクサベラもこれの共感したのではないだろうか。現在、戦前の記録が残っておらず正確な時期は不明であるが、牧野が校長に就任した際に、校長訓話になったと推測できる。

つまり古歌は、藤の花と校訓の謙虚さを結び付けているが、創立時に付けられたものではなく、さらにはクサベラが考えたものではない。後付けされたものであるが、クサベラが藤の花から感じた「謙遜」と、牧野の「謙虚」が重なり合って、藤学園のスクール・アイデンティティとなったのである。

4ー2．図像

藤札幌藤高等女学校の表象は先述した通り、校名の藤によって構造づけられている。藤の花と葉は隠喩として「強くしなやかな女性」をイメージさせ、景観から校章に到るさまざまな場面で、「藤」が表出してくる（図 5）。藤学園が経営している大学、中学・高等学校はいずれも藤の花をシンボル化したものである（図 24.25）。中学・高等学校の校章の由来は、キノルド記念館に展示されている制服の解説文に次の通り記載されている。「藤高等女学校 9 回生の制服の左腕に藤の花を図案化したマークが付いている。このマークは図画担当の林竹次郎先生の考案によるもので、物資不足の顕著になった時、袖のテープを廃して腕マークに変わったものと思われる。マークの改良は昭和 15 年林竹次郎先生が教え子の古瀬キヨ先生に藤の花のデザインを再考するように依頼し、その結果今のマークのデザイン

となった。縦の三本線は『謙遜・忠実・潔白』の校訓を表し、マークの右は藤の花、左は藤の葉を図案化したものになっている。昭和 23 年の学制改革以降、藤の花は、中学校は白地、高校は青色に区別され、今日に至っている」とある。この解説に従うのであれば、1934（昭和 9）年前後に初の校章ができたということになる。藤棚は既に校舎入口の重要なランドマークとなっており、藤の花が直接間接に女学校のシンボルになっていたということでもある。もっとも、藤女子大学の校章のデザインの由来は不明であるが、日本では藤と言えば藤原家を連想する。藤原家の家紋（藤紋）を参考にしたことも考えられるが、由来を明らかにするためには、さらなる資料の収集が必要である（図 26）。

図 24. 藤女子大学

図 25. 中学・高等学校

図 26. 藤紋左から、富小路藤、一条藤、二条藤、九条藤

4ー3. 色彩からみた藤

（1） 藤色の定着化

ここまで述べてきたように、藤学園の「藤」の表象構造は、野生の藤の生息地に想を得た校名の決定があり、そこから「藤の花」がランドスケープとして展開し、校舎内の藤棚と藤花の校章がそのイメージを定型化するという筋道を追って形成されてきた。加えて、重要なのが藤の色彩である。今日、藤学園のスクールカラー[27]として使用されているのが、藤の花から連想される「藤色（紫）」であり、HP や広報媒体で多用されている。色彩が持つ象徴やメッセージ性を考慮すると、“藤学園＝藤色”の関係性は、色彩も色名も関係性が強いといえる。これをスクールカラーとして使用することは有効的なことである。

スクールカラーはコーポレートカラーの一類型であり、今日、企業のロゴマークや商品と同じように使用される傾向にある[28]。統一感を出し、イメージアップやグレードアップの手段として、色彩を使用する例が増加しているのである。色彩だけでなく色名も利用し、イメージされる印象を付加して伝達することが活かされている[29]。藤学園の場合は「藤色」の色彩と色名が重なり合い、イメージと色彩の連鎖が起きているといってよい。しかし、この連鎖は大正から昭和にかけての設立当初の藤高等女学校に存在していたのであろうか。建築の様式や形態と違って色彩の記憶は曖昧になることが多く、しかもカラー写真やカラー印刷が登場し媒体に彩色がなされ始めるのは 1950 年代を待たなければならないので、それ以前のどの時点で藤色が学校の色として認知され始めたかは不明な部分が多い。

現状で使用されている色彩は図 27～29 を見てもわかるように、「藤色」という大きな括りであって統一感がないことが窺える。技術の発達した現代において、色彩に差異が生じていることで「藤色」のメッセージ性が弱まっているのではないだろうか。

また、藤色はランドスケープすなわち野生の藤と植樹された藤棚を端緒として生み出さ

れたものであるが、現在の二つのキャンパスのランドスケープを眺めてみると、設置されている藤棚は創立当時ほどの面積は占めていない。植栽計画の中で藤棚の配置とデザインから一貫性がやや失われているといってもよい。建物の色を眺めても、キノルド館、セミナーハウス、花川キャンパスは薄桃色（薄いピンク）であり、藤色ではない。著者の測色調査によるとキノルド館はマンセル値 10R7/2 で色相は赤、花川キャンパスはマンセル値 7.5R7/3 でこちらも色相は赤である。（R は Red の略記号）

藤学園を象徴する「藤色」という色彩と色名は定着しているものの、曖昧な記憶に加えて色相に関して明確な規定を設けていなかったために統一感が欠けているのが現状である。

図 27. 藤学園 HP

図 28. 藤女子大学広報誌

図 29. キノルド資料館広報誌

（2）藤色の定義

藤学園における「藤色」の定義は現時点では決められていない。しかし、先述のように藤色の大まかな色彩と色名は定着している。現在使用されている色彩の統一感が欠けているのは、藤色を表現する色幅は広く、濃淡や青み赤みで色相に差異が生じやすいからである。よって扱いに注意が必要な色彩であり、これを定義して統一する必要がある。色彩の手がかりとして日本工業規格 JIS 慣用色名「JIS　Z8102（2001）物体色の色名」[30]に採用されているものを色彩の基準として表 1 に示す。また、著者が測色調査した藤花のデータも表 2 に示す。（図 30）実際の藤花はいくつかの色のグラデーションで構成されているが、色相は P（Purple）で統一されている。スクールカラーを大まかな印象で「藤色」とするだけでなく、色番号を決め、数値基準を設けることで扱いやすくなる。色彩と色名を統一することで、藤学園の象徴をよりメッセージ性の高いものにすることが可能である。

表 1.　JIS 慣用色名

慣用色名	マンセル値	CMYK	RGB
藤色	10PB6.5/6.5	43 40 0 0	160 155 216
藤紫	0.5P6/9	49 47 0 0	148 139 219
紫	7.5P5/12	42 70 0 0	162 96 191
青	2.5P4/14	68 76 0 0	112 76 188
赤紫	5RP5.5/13	15 81 0 0	197 78 160

表 2.藤花の実測色調査

	マンセル値
藤花上部	5P8/2
藤花中央部	5P8/4
藤花下部	5P8/6

図 30.藤花の測色調査

５．新たな知見

以上のように藤学園の成立期から今日に到る「藤」の象徴性と色彩について考察を行った結果、藤の花を選択したことが学園の景観とイメージをかたちづくる上で、いくつかの影響を及ぼしていることが明らかになった。導かれた知見を以下にまとめる。

（１） 藤学園は「藤」を学園全体の表象構造の要としているが、その端緒は明治末から大正・昭和に到るミッションスクールの開校、特に高等女学校の認可に大きく関わり、名称の決定が、その後のシンボル、景観、建築、色彩の形成に大きく寄与した。

（２） 藤学園の校名は敷地が藤の名所であったことに由来する。他のミッションスクールとは異なり、土地の自然景観とりわけ花卉景観を主題として校名が生まれた点がユニークであり、そのことから校舎前の藤棚の設置など「藤花」の景観化、マリア像と植栽との相補による象徴作用へと展開されている。

（３） 藤学園に伝わる古歌『下がるほど人の見上ぐる　藤の花』は創立時に付けられたものではないが、設立当初から教員として参加し第 3 代校長となる牧野キクの古典的素養から生み出され、古典への参照を介して藤花の姿に校訓を重ねることになる。この構造は、雙葉学園や白百合学園など他の「花卉系」ミッションスクールと同一である。

（４） 藤色の色彩と色名をスクールカラーとなっていくのは、花川キャンパスの設置がきっかけとなっていて、全学のアイデンティティの形成に寄与している。しかし、現行の建築、ランドスケープ、各種媒体を測色すると、全体として色彩の統一感が欠けている。特に、校舎の色彩は、実際のランドスケープが指し示す紫（Purple）の色相を逸脱して赤（Red）の色相をまとっている。

（５） 藤高等女学校開設にともなって建設された木造校舎は、当初の段階では特に藤の花を意識して意匠されたものではなかったが、藤棚等のランドスケープが整備されるのにともなって学園全体のアイデンティティの拠り所となり、花川キャンパス（セミナーハウス）設置の時点で、校舎外壁が藤色に塗り替えられる。

６．結論

藤学園のスクール・アイデンティティを検討した結果、藤花のランドスケープから生まれた特異なものであることがわかった。下へ下へと咲く花の謙遜的さと蔓の強さやしなやかの両方が藤学園の象徴であり、それを女性像、つまりマリア像と重ねたのである。

藤花、藤色とマリア像の組み合わせこそが、藤学園の表象であり、本質である。この組み合わせを視覚的に訴えることで、藤学園のスクール・アイデンティティを学園内外に一層定着させることが可能である。一般企業のコーポレートカラーを使用したカラーマーケティング[31]が有効なように、藤学園のスクールカラーである藤色を定義化し、藤花とマリア像の組み合わせを各媒体に使用することが有効である。“藤学園＝藤色”の色彩と色名はすでに定着しているので、あとは色彩の定義を決めるだけで良い。色彩は無言のコミュニケーションツールであり、効果的な視覚情報である。

毎年変わらず、薄い紫色の花を咲かせる藤の花ように、藤色の定義を明らかにすることで、媒体等で使用する藤色の統一化を図ることが出来る。さらに、スクールカラーを有効的に活用するためには、建築や媒体に藤色をつけるだけでなく、創設当初本来の花卉的景観の充実さも求められる。

---

1 マルグリット・アンヌカール（Marguerite Hennecart, 1870-1940）は「幼きイエス会」（サンモール修道会）に属し、我が国の学校教育、社会福祉に貢献した。修道名サント＝テレーズ（Mère Sainte-Thérèse）。なお、横浜紅蘭女学校は第二次大戦後の 1958 年に横浜雙葉女子高等学校へと校名変更された。

2 田園調布雙葉学園：校訓・校章・校歌・学園歌, http://www.denenchofufutaba.ed.jp/about/symbol.html,2012.3.5 参照

3 白百合学園中学高等学校：学園の歩み, http://www.shirayuri.ed.jp/outline/history.html,2012.3.5 参照

4 仙台市白百合女子大学：校名・校章の由来,http://sendai-shirayuri.ac.jp/guide/emblem,2012.3.5 参照

5 函館白百合ＳＰだより：何色？, http://hakoshira.blog77.fc2.com/,2012.3.10 参照,2011.6.29 投票、2011/7/13 結果発表。70 票のうち白が 41 票であった。

6 クサベラ・レーメ追悼集編集委員会「クサベラ・レーメ追悼集」1984, p.10

7 学校法人藤学園：建学の精神,http://www.fujijoshi.ac.jp/hojin/motto.html,2012/3/5 参照

8 北見藤高等学校：シンボルマークについて,http://www.kitamifuji.ed.jp/life/guide.html,2012.3.5 参照

9 藤学園 HP（http://www.fujijoshi.ac.jp/hojin/history.html）では入学者 164 名と記載されていて、数字に食い違いがある。

10 角幸博「マックス・ヒンデルに関する研究その 2.　札幌藤高等女学校（キノルド館）について」日本建築学会北海道支部研究報告集、pp.165-166

11 札幌の文化財を守る市民の会「学舎よ永遠に（まなびやよとわに）」2002, p.15

12 元北海道大学工学部建築学科角幸博教授に 2012.3.9 取材

13 10R7/2 は、色相は赤、明度は 7、彩度は 2 を表す。2007.7.16 測色調査

14 藤女子大学人間生活学学部木村晶子教授に 2012.3.8 取材

15 札幌の文化財を守る市民の会、前掲書, p.3

16 同上, p.41　札幌藤高等女学校第五回卒業生（昭和９年）永井道（旧姓三宅）の記述による。

17 藤女子大学「広報藤」2001, p3

18 藤学園旭川中・高等学校「20 周年記念誌　クサベラ・レーメ先生特集号」植平印刷株式会社,1873, p 9

19 札幌の文化財を守る市民の会、前掲書、p.66

20 藤女子大学「広報藤連載、シリーズ＜学内巡礼の旅＞」2009, p.8

21 記念誌編集委員会「藤女子短期大学 50 年.藤女子大学 40 年記念誌」2000, p.8

22 キノルド記念館パネル展示より

23 クサベラ・レーメ追悼集編集委員会、前掲書、p.10

24 記念誌編集委員会、前掲書, p.217

25 同上, p.4

[26] 北海タイムス紙、1973 年 1 月 9 日から 23 日まで 10 回にわたり掲載された。

[27] 学校を象徴する色、シンボルカラー。教育機関が自らを示す色を定めるという事象は世界各国でよく見られる。東京大学のカレッジカラーは淡青（ライトブルー）で、更に学部ごとのカラーも決められている。

[28] 企業や団体等の組織を象徴する色、シンボルカラー。組織が対外的に意図するイメージやコンセプトを提示することが多く、図案にコーポレートカラーを用いることがある。ロゴマークや旗、社名等の看板、製品パッケージ、広告、ウェブサイトのデザイン、車両の塗装などをその色で統一することが多い。JR グループ、郵政局、日産自動車など大手企業の例がある。

[29] 色彩学会「新編色彩科学ハンドブック第 3 版」財団法人東京大学出版会．1980, p.262

[30] 日本工業規格 JIS 慣用色名「JIS　Z8102（2001）物体色の色名」に定められた 269 色の中から紫系統の色をいくつか抜粋した。マンセル値は、色相・明度/彩度の色の三属性による表記方法。RGB は、パソコンモニタ用の色データ。赤・緑・青を 0～255 の 256 段階で表す。CMYK は、4 色用印刷用の色データ。シアン・マゼンタ・イエロー・ブラック、それぞれの百分率で色を表す。

[31] 色彩の特性を活かし、消費者に強いインパクトを与え、売り上げを向上させるマーケティング手法。